

## 故岡本昌幸教授を偲ぶ

八 田 英 二

六月十八日の日曜日、降りしきる雨のなか、経済学部教授岡本昌幸先生は、ご家族の方々、大学関係者、それに大勢の教え子に見送られ、天国へ旅立たれました。あまりにもあまりにも突然のご逝去に、わたしたち一同、口にする言葉もなく、手を合わせ、ただ先生のご冥福をお祈りするばかりでした。その八日前、六月十日に先生は五十四回目の誕生日をお迎えになるところです。働き盛りの五十代、ご家族も、同志社も、そして学界も、まだまだ先生のお力を必要としておりました。

突然の心不全が先生をおそったのは六月十五日の夜更けでした。先生は、常日頃から健康には人一倍の注意を払われておりました。かかりつけの医師の指示通り、規則正しい生活ペースを守り続けてこられました。それを知るだけに、ご逝去の一報に絶句してしまいました。取り急ぎかけつけた先生のご自宅で先生との悲しい対面をさせていただきました。三日前、大学の研究室でお話したとき、あのときとすべて同じ、いつものやさしい先生が安らかに眠っておられました。ゆっくりと起き上がり、「八田君、寡占価格が……」と話しかけられたとしても、少しもおかしくはありませんでした。

先生はこの五月十三日に鬼籍に入られた英文学の権威、同志社女子大学名誉教授 故岡本昌夫先生、いつ様の三男としてお生まれになりました。お姉さまと四人のご兄弟に囲まれて、のびのびとした少年時代を過ごされました。戦時中は滋賀県に疎開しておられたとか、琵琶湖名産の鮎寿司は好物の一つだったとお聞きしております。名門、紫野高等学校から同志社大学経済学部に入学され、先生は経済学徒としての第一歩を踏みだされました。お父様が同志社に奉職しておられた関係から、先生も当然のこととして同志社を選ばれました。経済学部では俊英の集う黒松滋ゼミナールに学ばれ、そこで初めて終生のご研究テーマである産業組織論の書物を手にされました。

学者のご家庭に育ちになったこともあってか、経済学者への道を進むべく先生は迷わず大学院へ進まれました。

大学院生として学究生活に入られてからも産業組織論への興味は尽きることはありません

せんでした。修士課程から博士課程に進まれてからは、計量経済学的手法を駆使されて、寡占市場の実態に鋭い分析のメスをふるわれました。寡占企業による管理価格の設定やその弊害についての先生の業績は学界で極めて高い評価を受けております。先生のご学風には、恩師故黒松巖先生をはじめ伊藤史朗先生、森一夫先生、そして京都大学経済研究所の故馬場正雄先生によるご指導が色濃く映しだされています。

先年、ご逝去になった経済学部教授故西村晃先生の追悼論文集に寄せられた「産業内生産性分散に関する一考察」が、先生の手による最後の著作となりました。ご存知の方も多いかと思いますが、先生と西村晃先生とは、助手時代より終生変わらぬ友情を温めてこられました。パークレー校とデービス校と少し離れておりましたが、お二人が在外研究員として、同じカリフォルニア大学で研究生生活をおくっておられたときには、家族ぐるみのお付き合いだったとお聞きしております。西村晃先生が薬石の効なくお亡くなりになったとき、ご一緒したお通夜の席では、先生の瞳に大粒の涙が溢れていたのを憶えております。追悼論文集には間に合うようにと、昨年夏にはコンピュータを相手に複雑な計算をこなしておられました。推稿に推稿を重ねられ最終稿を提出された折、学者として、そして友人としての務めを果たしたというお顔をしておられました。

本年の四月からは国内研究員として、週に一度のゼミナール以外は講義からも開放され、腰を落ち着けて研究に取り組まれておりました。来年三月には田口芳弘先生が定年となり、ご退職を迎えられます。田口先生の古稀記念論文集までには、是非とも新しい論文をものにするお熱く語っておられました。多角化を軸にすえて寡占企業の行動を展望するという構想をおもちのようで、必要なデータの収集にとりかかっておられました。

教育にしろ研究にしろ、先生ほどの着実かつ慎重な方を知りません。論文の発表でも講義でも、先生はつねに完璧を期しておられました。少しでも問題が残っていると徹底的に調べあげられました。ご自分が納得されるまで、決して口にはされたり文章にされることはありませんでした。自分が分からないことを人に教えるわけにはいかないという先生の堅い信念によることはいうまでもありません。工業経済の講義に出掛けられる前に私の研究室にお立ち寄りになり、学生諸君にこのような説明をするが、問題はないだろうかと幾度尋ねられたことでしょうか。論文の草稿をおもちになり、先生の意図が正確に伝わっているかどうか、お尋ねになったこともございました。先生にとりまして、研究発表も講義も、やり直しのきかない真剣勝負の連続でございました。私にとりましては、学問の道を歩むことの厳しさを教えていただいているという緊張のひとつでござ

いました。私事ではありますが、先生は職務上は同僚であり先輩であったのですが学問上そして教育上は私の恩師とよぶに相応しい人物でございました。講義も研究も十二分以上に準備され、完璧を期される先生の慎重な性格を知りながら、ここ数年、私は先生に他学部生対象の「経済学」のご担当をお願いしてまいりました。もちろん先生は快くお引き受け下さいましたが、ご講義の準備でどれほど先生の貴重な時間をとってしまったのか、今更ながら心苦しい思いをいたしております。

先生は近年、写真撮影に関心がおありのようでした。被写体はゼミナールの学生諸君が多かったようです。学生諸君との記念写真を何枚も撮られております。その写真が額に入れられ、光塩館の先生の研究室の壁にいまも飾られています。文頭のお写真も、そのなかから拝借した一枚です。先生はめったにお酒を口にされませんが、ゼミ生がざくばらんに話せるならと、コンパに付き合われたり、お宅にお招きになったりと、ゼミ生との飲ミニケーションにも気がつかっておられました。

教育や研究にもまして先生が大切にされ、また心の支えにしてこられたのは、ご家族三人の家庭生活でした。奥様とのお出掛けや、お嬢様のご成長、ご一家揃ってのスポーツなど、ご家族との触れ合いや絆を先生はことのほか大事にされ、家族愛と労りに満ち溢れた素晴らしい毎日を過してこられました。良い教育者であり良き研究者であるとともに、良き夫であり良き父親であることを先生はとても誇りにしておられました。この度のご不幸で、ご家族の哀しみが完全に癒えることはないかもしれません。しかし、残されたご家族のことを誰よりも誰よりも気にかけておられるのは、やはり天国の先生ではないでしょうか。

光塩館五階に先生の研究室がございます。エレベータを降りてすぐ左手、先生の研究室の扉に付けられた行先表示は、あの日以来、「帰宅」を指しています。数か月を過ぎたいまでも、研究室の前を通るたび、「在室」の表示に替わっていただと思うことは二度や三度ではありません。先生のご冥福を心からお祈りいたします。

(『同経会報』第53号、1995年10月号より転載)